

波間に消え行きし人々よ

宮城県 蜂屋 豊子

サハリン

私は、テレビや新聞・雑誌などで、この言葉を、文字を耳にし、目にするとき、胸の奥底から、わきいずる郷愁と、過ぎ去りし思い出で胸がいっぱいになる。

そこには、今は亡き父と母の若かりしころの姿が。今ではそれぞれ、結婚した姉妹たちと一つ屋根の下で過ごした日々の生活、そして、どこの地に移り住んでいるのか、再び相まみえることの難しい幼なじみの友や、学友の姿が、吹雪の舞い散る厳寒の彼方に、懐かしく思い浮かんでくる。

恵まれた自然。恵まれた資源。何よりも豊かな海の幸。オホーツク海の手で友と一緒にバケツいっぱい採ったホッキ貝。厳冬の夜、空には手の届きそうなく所々に、宝石をちりばめたように光り輝く北斗七星

をはじめとした星座の数々。晩夏から晩秋にかけての白夜。この白夜には、夜遅くまで遊んだものだった。

白夜の空にひと際大きく浮かぶ満月のお月見では、近所の幼なじみと一緒に、家々の出窓に供えられたお月見の御馳走を、無礼講よろしく、集団で食べ歩くのが楽しい行事の一つだった。

この白夜の満月の夜を境として、樺太の冬は深まっていくのであった。そして、人々は、暖炉で暖められた家の中の生活へと入って行くのが常であった。

この近所の幼なじみとは、吹雪の激しい日は集団で学校の登校・下校を共にし、一寸先も見えない地吹雪の中を、皆で、お互い声を掛け合い、いたわり合いつつ、学校へ、家路へと急いだ。

神社の裏山で滑ったスキー。校庭のリンクで滑ったスケート。「オタスの森」と呼ばれるツンドラ地帯に住んでいた民俗衣装のギリヤークの人々。

敷香の街と、このオタスの森との間には、幌内川が大きく横たわっていた。冬にやるとこの幌内川は厚い氷におおわれ、その上を、トナカイの群れが鈴を鳴ら

して走り、大きな樺太夫が轡を引っ張って人々を運んでいた。

家の外は、屋根の上から地上まで届く大きなツララ。その中を毛皮に身を包んだ人々が白い息を吐きながら、長い冬を過ごしていた。何もかもが凍てつく樺太の冬は、また、幻想の世界でもあったような気がする。

春の訪れを告げるオホーツク海の海面に流れ寄せる分厚い流水。流水が去り、樺太の長い冬にも、ようやく春の陽ざしが輝くころ、地上には陽炎が立ち始めるのであった。表面は土の香りが漂っていたが、その底は、まだ、凍てついていた。その凍てついた土も、やごと、溶ける六月、樺太の冬は終わりを告げ、遠去かたて行く。そして、やごと、訪れた夏のそよ風に揺れていた高原の花々を摘みながら、短い夏をいとおしんだ。

今、振り返ると、戦争という足音が身に迫っている時代ではあったが、この時期が、私にとって、これまでの生活の中で、一番忘れ難い、楽しい日々であったような気がする。

もし、樺太が今でも日本の領地であつたらと思うと、望郷の思いにかられる。

長いツララが溶け始め、流水がオホーツク海の沖合いに消え去って行く春はまだ遠い、昭和二十年四月、私は、希望に胸ふくらませ敷香高等女学校へ入学した。初めて接する外国語の英語に興味津々であつた。でも、それも束の間、戦局の緊迫に伴い、間もなく、講堂で弾丸磨き。一、二年上の上級生は勤労奉仕で、援農という名目の下、近在の農家に出掛ける毎日であつた。

同年代の中学生は、子科練など志望し、あるいは、陸軍・海軍の志願兵として出征して行つた。雪一面に覆われた銀世界の中、ひと際赤いタスキを肩にし、日の丸を染め抜いた鉢巻きを額に巻いて、校庭にあつた壇上から別れを告げて、敷香の街から内地へと旅立つて行つた。

樺太の冬は、長く、厳しい。でも、各部屋には暖炉があり、部屋の中は、いつも暖かかった。

当時、父はバルブ関係の仕事に携わっていた。姉が四人、妹が一人のにぎやかな六人姉妹に両親。長姉は

女学校の教師、姉二人は女学校を卒業して、一人は官庁に、一人は水産会社に勤務していた。

たった一人の長兄は軍医として、はるか遠い満州のハルビンという地に勤務していた。母ははいつもこの兄の安否を気遣い、写真の前に陰膳を据えて無事を祈っていた。私は、この母の姿を終生忘れることができない。

戦争の足音が樺太の地にも近づいてくるのを感じたのは、昭和十九年の六月ころ。オホーツク海から敷香の街に、艦砲射撃が撃ち込まれたときであった。このときは、街中が騒然となった。我が家でも早速、目ぼしい物は、国境に近い奥地へと疎開してしまった。引き揚げて来るとき、これはと思う物は何一つ身につけることも、手にすることもできない状態を作ってしまったのであった。終戦も間近いころ、ソ連参戦となり、敷香の街にもソ連機の襲来を受けるようになった。

それでも銃後の守りをしっかりしなければという掛け声の下、女学校の校庭に、皆で「若い血潮の子科練の……」など、いろいろの軍歌を歌いながら、慣れぬ

手付きで鋏を持ち、明日の食糧のため、ジャガイモの種を蒔いて、それが、大きくなるのを楽しみにしていた。

八月十五日。女学校からの帰宅途中、友人の家のラジオで、玉音放送を聞いた。私は、ただ初めて耳にする天皇陛下のお声に接して感激し、内容はよく理解することができなかったが、家に帰ると、近所の人たちが集まっていた、日本が戦争に負けたことを知った。皆、虚脱状態であった。虚脱状態というのは、あのよくな状態をいうのだなあと、今振り返るとそう思う。

でも、ソ連機の襲撃もなく、明るく点灯する電灯の下、ホッとした気持ちになったのも事実であった。しかし、このとき、以下後述する留萌沖の引揚船三隻のうち、二隻沈没という痛ましく悲しい災難が起ころうとは、夢にも思っていなかった。

八月十八日の早朝、けたたましいサイレンの音とともに街中の婦女子と十四歳以下の男子に対して、ソ連兵が国境を越えて南下して来ているので、翌朝、速やかに避難するようにという避難命令が出たのであった。

私は、今思い出してもおかしくなるのは、その日の夕方、女学校の校庭に走って行って、ジャガイモを夢中になって掘り起こし、バケツいっぱいにして家に持ち帰ったことであつた。苦勞して育てたジャガイモに未練があつたのであろうか。このときが、懐かしい通学途中の敷香の街や、女学校の校舎との最後の別れとなつてしまつた。

樺太の夏は八月といつても、そよ風が吹き、コスモスが揺れているぐらいの暑さだが、荷物を少なくするため、着れる衣類はなるべく身にまとい、家族全員敷香の駅に集合し、ほかの大勢の人たちと一緒に、停車していた貨物列車に乗り込んだ。そのとき、ただ一人残る父が心配だつたが、きつと、すぐ父も避難してくるだろうと思つてゐた。

列車は無蓋車だつたので、石炭のがらが目に入って痛かつたのを記憶しているが、皆、無言でジーツと座つてゐた。どこへ行くのだろう。どうなるのだろうという思いで皆、胸がいっぱいだったのだろう。乳飲み子を抱えた人は、授乳などで一番苦勞してゐた赤ん坊

が哀れでかわいそうだつた。緊張と御飯を食べることができなかつたため、お乳が十分でなかつたのである。列車は闇路を走り続け、翌朝、敷香の街から終点の大泊の港にたどり着いた。港には逃げまどう人々であふれてゐた。

途中通つた樺太の中心土地豊原も大泊も、空襲を受けて、街は傷つてゐた。幸いにも、私たちは、千島列島に行く途中で終戦になり、停泊してゐた新興丸という輸送船に乗船することができた。

当時、私の母は、町内の愛国婦人会の会長をしてゐたので、引揚げ当時、副会長の鈴木さんという方と二人で、大通り町内会の方たちのお世話役として働いてゐた。

乗船する際、入口が二つあり、当然、右と左に別れて乗船した。会長の母は右に、副会長の鈴木さんは左に、お互い「よろしく頼みます」とあいさつを交わし、右と左に別れた。それにつれて私たちも母に従い、右の入口から船の船底へと入つて行つた。

この右と左が、人間の生と死という運命をもたらす

結果になってしまったのであった。

船は静かに港を離れ、流浪の民を乗せたまま、いずこの地に着くのかさえ分からぬまま進み始めた。

船底は暗く、暑かった。ふと考えてみたら、藪香の街を離れてから口にしたのは、オニギリ一個だけだった。でも、空腹と感じることがなかったのは、きつと、緊張の連続だったせいだったろうか。

外が明るくなりかけた朝方だった。突然、「ドカーン!!」という大きな音とともに電灯が消え、暗闇となったところに、海水が上からドォーつと落ちてきた。皆、びつくりして騒然となったとき、水平さんが、「ただ今、丸太にぶつかりました。皆さん冷静にしてください」とアナウンスした。「そうだったのか」と安心してまた、まどろみかけたとき、便所から戻って来た姉が、「大変だ!!船がやられて大勢の人が流され、船が沈みかけている」と震えながら叫んだ。

皆、急いで甲板に上って見たら、そこは、さながら地獄図の様相であった。

船底に大きな穴があき、人々が海の底に沈んで行く

姿が見えた。幼子を抱き「助けて!!」という叫び声を残したまま、海底に姿を消して行ったお母さん!! 浮かんでいる荷物の上に立ちすくみ、髪ふり乱し、両手を差し伸べ助けを求めていた中年の婦人!! 浮かんでいる荷物に必死にしがみついていた娘さん!! その人々も、やがてアツという間に波紋に流され、消えていった。私は思わず目を覆った。

そのとき、甲板で砲弾の破片で負傷し、倒れていた水兵さんが声を振り絞るように、私に「見てはいけない、見てはいけない。早く、もっと上の甲板に上るよ」に」と声をかけ続けてくれた。

家族全員、夢中で大勢の人が集まっている一番上の甲板にかけ登った。何がどうなったのか分からぬままに。砲弾が絶え間なく炸裂し続けた。その間、幾人もの人々が、「助けて!!」と叫びつつ、波間に消えていった。

砲弾の音が鳴り止んだとき、悲しいラッパの音が波間に流れた。それは、「海行かば水漬く屍 山行かば草むす屍 大君の辺にこそ死なぬ かえりみはせじ」

という、戦時中、戦況の合間に、戦死者の霊を慰めるため、ラジオから流されていた「海行かば」という万葉集に収められていた和歌に作曲された、莊重・悲愴な音律で、そのラッパの音とともに、

「皆さん、船と運命を共にしてください」という船長さんの悲痛な声が聞こえた。

船員さんの入った風呂の生ぬるい水が皆に配られた。これは当時、子供だった私には理解できなかったが、死に水の意味が込められていたようだった。

ボートが降ろされ、船の周りをボートが静かに回っているのが見えた。これは沈み行く船に対する海軍式の儀式のようだった。皆、シーンと静まり返り、冷静だった。皆の頬に涙が伝わった。私は、「母と姉妹と一緒に死ぬんだから寂しくない。苦しくない」と一生懸命、自分自身に言い聞かせていた。「戦争が終わったのに、なぜこんな目に遭うのだろう」とも思った。

船は一個所に大きな穴をあけたまま、静かに、ゆっくり沈んで行くのではなく、奇跡的に進んでいたのだった。数時間後、遙か彼方に山が見えた。

「助かるのだ!! 助かるのだ!!」と思った。嬉しかった。

そこは、北海道の留萌という港だった。船は、ゆっくり岸壁に近付いていった。

船が岸壁に横付けになったときの嬉しさは、言葉で表すことができない。でも、その嬉しさとは裏腹に、上陸した港の岸壁には、多くの人々の死体が、並べられていた。

自分が生きていることが、不思議に思われた。母は責任者として、並べられた一人一人のムシロをとって死体の確認に当たった。胸が張り裂けそうだったと言っていた。病院に収容された人が人にも会いに行つた。幼い子が親を失い、空ろな目で、ジーっと天井を見ている姿は痛々しかったとも言っていた。後年、あの子どもたちはどんな人生を送つたのだろうかと胸を痛めていた。

そのときの留萌の人たちは、私たち遭難者を一軒一軒の家に割り当てて、とても、よくいたわってくれた。その温かさは今でも忘れることはできない。

母は、共に責任者として乗船した際、右と左に別れた鈴木副会長さんの姿を探し求めたが、左の入り口から乗船した人々の船底に砲弾が命中したので、そこにいた人々は全員死んだのであった。不幸にして鈴木さんは、遭難したのであった。母は、同じ工場にあった鈴木さんの死を心から悼み、何とかしてそのことを、札幌にいと聞いていた遺族の方に伝えたいと思ったという。

札幌の道庁に遭難事実を報告し、私たちのいる留萌の街に戻る列車に乗って、発車のベルが鳴ったとき、一人の婦人がホームにかけ込んで列車に近づいて来た。母は思わず、「鈴木さんのお姉さんではないですか」と声をかけたら、その人は正しく、亡くなった鈴木さんのお姉さんだった。

駅に行けば、引揚者の方に会える。もしかしたら、妹の消息を知ることができるのではないかと思い、ホームに来たということだった。

短い時間だったが、鈴木さんの死を伝えることが出来たし、同時に、きっと、鈴木さんが自分の死を知ら

せて欲しいと導いたのに違いないと、目を閉じ、在りし日の鈴木さんをしのび、遠ざかるお姉さんに手を振り続けた。このとき、母は、人間の靈魂の存在を知ったと、後年、しみじみと述懐していた。

引揚げは三隻の輸送船に分乗して行われ、留萌沖で攻撃を受け、私たちの乗った船は、かろうじて留萌にたどり着いたが、ほかの二隻は同じく攻撃を受けて沈没し、乗船していた人々は全員遭難した。

やがて、私たちは母の実家を頼り、仙台へと向かった。仙台も空襲で焼野原であった。実家は仙台市の郊外、広瀬村という所であった（現在は仙台市に合併になり、青葉区内となった）。母を含めた七人が転がり込んだのだから、実家も大変だった。食糧難と厳しい生活の現実が待っていた。著一本もない生活からのスタートだった。母は、懸命に近所の農家の手伝いなどして、私たちの生活を支えてくれた。私たちも、耐乏生活に歯を食いしばって頑張った。

そのときの私たちの希望の星は、兄が、無事、復員して来てくれることであつた。でも、その兄は二度と

祖国の土を踏むことなく、南十字星光り輝く星空の下、
グアム島において、二十五歳という若い命を散華した。

引揚げ後、母と長姉は必死になって兄の消息を尋ね
回った。母は幾度となく、ワラにもすがりたい思いで
占い師の元に行き、その度に落胆したり、希望を見付
けたりしていた。

私が、今でも忘れられないのは、夜、寝るとき、母
は、必ず雨戸一枚を外して寝たことである。それは兄
が帰って来たら、すぐ、家に入ることができるように
との配慮からだった。

そんな私たちに兄の戦死が伝えられたのは、引揚げ
の翌年の小雨降る十月だった。その紙切れを手にした
とき、母が倒れたのを覚えている。

寂しい葬儀だった。戦死の公報といっても、薄い紙
切れ一枚。役場に行って遺骨を頂いてきたが、その遺
骨箱の中には、砂が一握り入っていただけであった。

粗末なミカン箱の上に置かれた兄の遺影と遺骨は、
母や私たちに悲しみと同時に、心の区切りを与えてく
れた。母は、私たち家族がこうして引揚げて来られた

のも、あの世で、兄が守ってくれたからだろう。そう
思うことによって、心の整理をしたようだった。

私たちの生活は、困窮と苦難の日々の明け暮れだっ
た。

そんなとき、父が引き揚げてきた。私たちが引き揚
げて来てから三年目の冬であった。やせ衰えた父を見
たとき、よくぞ無事だと思った。

残留した父たちも、私たちが敷香の街を離れた直後、
オホーツク海の沿岸沿いに大泊を目指して、徒歩で南
下し続けたそうである。

そして、最後に敷香の街を後にした人々たちによって、
街に火が放たれ、大半は焼野原となった。

この避難は、交通機関が全く途絶え、全員徒歩によ
るもので、避難者の群れには敷香の街より以北の国境
に近い古屯や気屯などに住んでいて、逃げ遅れた人々
ちを含んでいた。皆、疲労困憊のあまり、オホーツク
海の沿岸で力尽きて倒れる人々、赤ん坊、子供ら多く
の犠牲者が出たという。

父は避難を途中であきらめて、また、敷香の街に戻

つたら、幸い、家は無事に火災から逃れ残っていた。

残留した父の元にも遭難のニュースは届いていた。

父は、きつと家族は全員死んだに違いないと思って、毎日仏壇に手を合わせていたという。

父は私たちの元に無事引き揚げてきたとき、五十五歳だった。皆、定年を迎える年に、父はまた、新たな人生を歩み出さなければならなかった。幸い、役場に就職し、それとともに、私たちの生活も徐々にではあるが、安定することができた。その間、引揚者団体の理事として、引揚者の方々の援助に携わっていた。

その父も、昭和四十二年三月、七十四歳で他界、母も昭和五十年十一月、七十八歳で他界した。

若かりしとき、二つの海を乗り越えて渡島した両親。きつと、死の間際にも、遠く異国となった樺太への思いは深かったろうと思っている。

後年、聞いた話ではあるが、留萌の港で悲しい泣き声が人々の耳に入るので、有志の方たちで慰霊碑を建立したという話を耳にした。

戦争という時代の流れの中で、幼子を抱き波間に消

えて行った若いお母さん。兄のように、遠い戦場で若い生命を散らしていった多くの人々。皆、どんな思いで死んでいったのだろうか。

母の死後、母の遺品の中から、兄が家族に寄せた最後のハガキが見つかった。それには「五月五日付の御手紙拝見致しました。皆様の変わり無く、御元氣の模様何よりです。一日に二、三べん手紙を出しては読んで居ります。

南十字星光る星空の下、椰子の木の下で、遠く、皆様の御幸福を祈って居ります。

敏子、豊子体に氣を付けて、目出度、女学校に合格する様祈って居ります。嘉代子元氣になった由、安心しました。

正子もう卒業ですか。手紙を寄越す様に伝えて下さい。

自分は元氣で本務を御奉公して居ります。本格の關係上、敵の弾に斃れるより、寧ろ、病に斃れるかもわかりませんが、どちらにしろ、思い残す事はありません。二十五年の生涯、幸福に満ちて送れた事を、お父

様、お母様に厚く御礼申し上げます。

当地には色々珍しいものがあります。椰子、パイナップル、バナナ等熱帯の果物が見られます。

敷香の銃後奉公会の新聞、樺太新聞、面白い記事がありましたら送って下さい。皆様の写真送って下さい。さようなら」としたためてあった。

皆、兄と同じように戦場で、父母や兄弟姉妹に、また、妻や、残された我が子に熱い思いを残しつつ、祖国のために散っていったことだろう。

五十年の歳月を経て、今、グアム島は若い新婚のカップルが訪れる観光地となっている。その草葉の陰で、ひっそりと眠っている御霊があることを忘れてはならないと思う。この平和で、豊かな生活もこうした人々の犠牲の上に成り立っていることも……。

〔敷中校歌〕

(一) 皇土の北端 敷香にありて

われらは学び われらは励む

尊き祖国 愛する樺太

時代の一線 劃するところ

防衛開拓 任務は重し

(二) 御稜威は遍ねし み民の幸に

われらは競い われらは誓う

ああ見よかしこ 敵たり国境

冬忠報国 ひとしく起きて

神州不滅の 前途を護れ

〔敷女校歌〕

(一) 涯なる北の国の境 標の石に刻まれたる

尊き菊の華の蔭に 操は松の敷香乙女

ああ我等空高く 仰ぐなりみいつのもの

大和乙女

(二) 清きは胸の雪の草の 時代の波の寄せ来るとき

健やかなれや望み広く 強くぞ生きん敷香乙女

ああ我等空遠く 仰ぐなりみいつのもの

大和乙女

毎年、敷香中学校、女学校の同窓会が東京と札幌で開かれていた。決して増えることのない同窓会であり、いつかは無くなる運命にある同窓会でもある。この中

で、遠い青春の日々を偲び、引揚げ後の苦難の日々を振り返り、この校歌を皆で声を合わせて歌うとき、異国となった樺太に残り、不幸にしてこの地で果てた同窓の友に、そして波間に消えていった同窓の友（一家全滅した人々が多い）に「歌声よ届け、御霊よ安かれ」とばかり、鎮魂の思いを深くすると姉たちは語っている。

今日もあの樺太の夜空には、北斗七星が美しく光り輝いていることだろう。オホーツク海の水平線は、あの真つ赤な夕日の光に包まれていることだろう。ハマナスの花が、そよ風に揺れていることだろう。白夜の夜空には、満月の月が輝き、地上を照らしていることだろう。雪がしんとと振り積もっていることだろう。故郷は遠くに在りて思うもの。私は、今この言葉を静かにかみしめている。

【執筆者の横顔】

蜂谷豊子さんは昭和七年樺太の敷香町でバルブ業を経営していた両親のところで生まれ育った。樺太の小

学校を卒業、二十年四月敷香高女に入学し、その十月に仙台の尚綱女学院高校に転校、東北学院大学英文科を昭和三十年に卒業、豊子さんの勉学は十七年間もの長い青春をおくったわけである。

そして、生粹の樺太育ちで、本州から遠く離れた樺太は、まさに外地のごとく感じられ、はてしなく忘れがたい楽しい日々であったと語る豊子さんである。

この平和な樺太は昭和十九年六月ごろから戦局が緊迫している情勢が子供心に伝わった。

二十年八月十五日の玉音を拝聴してからは、内地に引き揚げることに家族で強力しあつて準備にとりかかり、母と兄弟六人で母の実家である宮城県広瀬村に引き揚げてこられた。

豊子さんの兄弟は六人で、長男一人そのほか五人はみな女子なので、両親は長男を医師に育てあげたが、召集なつた軍医の長男が無事帰還するように毎日陰膳を据えて待つていたのにゲラムで戦死したとの公報をうけた母親はショックで倒れた。

豊子さんは、ここで母に死なれてなるものかと母を

いたわりながら元気付け説きふせた。「私ども一家が無事母子そろって七人引き揚げてこれたのは、大泊から乗船して留萌に着くまで引揚船が二隻もソ連の砲撃で沈没して何千人と全滅したり、たった一人の兄もグアムで戦死したけれども、この方々がみな、お母さんの無事を祈ってくださいたのではないでしょうか、お母さん、だから生きて広瀬村の古里に帰れたでしょう有り難いことです」と同じことを何べんも繰り返したのが効を奏したのか、一命をとりとめたのである。いつでもどこにいても忘れられない樺太に思いを走らせる豊子さんの心情である。平和さながらの桃源郷の樺太に不法にも日ソ間で結んだ条約を打ち破って、ソ連軍は空陸海から砲撃爆撃し、進入後は日本人から略奪、暴行、殺戮を繰り返した。生々しい体験は、豊子さんの胸中からは永遠に消えることはないだろう。

(引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助